

Interview ①

株式会社カネカ Health Care Solutions Research Institute 再生・細胞医療研究所

佐藤 康史



出身大学・卒業年度：北海道大学大学院 総合化学院 総合化学専攻 2015年 博士後期課程修了
博士論文タイトル：移植用軟骨様細胞シート作製に関するプロセス工学的研究

(※2017年夏執筆時点の内容です)

「現在の仕事について」

◆担当職務

再生・細胞医療に関する研究開発

◆現在までのキャリアパスとその配属での仕事内容

2015年3月 北海道大学大学院総合化学院博士後期課程修了 幹細胞を用いた軟骨組織工学の研究

2015年4月～2016年3月

(公財)先端医療振興財団 再生医療研究部 博士研究員
幹細胞を用いた脳梗塞の再生治療の研究

2016年4月～2017年8月現在

株式会社カネカ入社, 再生・細胞医療研究所配属
現在の職場で再生・細胞医療に関わる研究. 特に iPS 細胞の培養技術の開発

◆そこでのやりがい

再生・細胞医療という最先端の研究分野を, 社内だけではなく, アカデミアなど社外とも協力しながら研究を進めていけることです. 色々な人とディスカッションを繰り返し, 研究で得られた成果を実用化に向けて取り組んでいくことに楽しさがあります.

◆現在の会社・組織(アカデミアを含む)の魅力

若い人が積極的に意見を言える風土があり, 意見を聞いてくれる人が多く, 発言しやすい雰囲気がある. また, 人材育成にも熱心で教育をしっかりしてくれるところです.

研究面においては外部の研究機関との共同研究を積極的に行っており, 社外の人のさまざまな考えに触れる機会が多いのも魅力です.

◆現在の就職を決めた理由

有機化学, 高分子, ライフサイエンスなど幅広い事業・研究領域を持つ会社であり, 多様な技術を融合することにより, 新しい技術・製品を作り出せると感じたからです.

◆将来設計(描けるキャリアパス)

数年間は研究者としての能力を磨きたいです. 知的財産やビジネス戦略など研究以外のことで学ぶことが多いので, そういった能力を今後伸ばしていきたいと思っています.

◆挑戦したいと思っていること

海外で仕事(研究)をすることです. 自分自身が研究者として成長することも重要ですが, 人脈や知識を身につけ, それを活かし多くの研究者をつなぐハブとなることで, 大きなことを成し遂げたいと思っています.

◆社会人として一番感動したこと

困難な状況でも課題を解決し, プロジェクトを進めていく力やチームワーク. それぞれの人が強みや経験を活かして活躍する姿に憧れを感じます.

◆社会人として一番困難だったこと&どう乗り越えましたか

社内外の調整をする慣れない仕事の中で, 相手に自分の意図をうまく伝えることができず, 揉め事になったこと. その際, 先輩や上司に相談し, 交渉に入ってもらい解決できました. 仕事を進めていくうえでチームワークやコミュニケーションが重要だと感じました.

◆仕事のプロになるコツ

自分の「得意なこと」を見つけて伸ばすことだと思います. 誰にも負けない「軸」ができると自信につながりますし, 他人からも信頼されるようになると思います.

◆博士力, どこで発揮していますか?

研究における専門性は発揮できるようにしています. また, なるべく物事の本質を考えるようにしています. その他, 発想力, 深く考える力, 論理的思考力, 課題解決力, 忍耐力など, 研究を立案し, 纏め上げていく能力が博士人材として日ごろから求められていると思っています.

「人生について」

◆何のために働くのですか？

自分の成長のため、そして社会や人の役に立つため。自分のやった仕事が、いつか社会の役に立つ、そう思って仕事をしています。

◆ご自分にとって、お金を稼ぐ意味

生きていくためにお金が必要という面もありますが、自分が行ったことへの対価や将来への期待という面もあると思います。それに応えられるように成長したいと考えています。

◆ワークライフバランスで工夫していること

健康第一。健康でなければいい仕事もできないし、良いアイデアも思いつかないと感じています。自分が楽しく健康に仕事ができれば、きっといい仕事ができる、と思っています。ストレスを溜めないように、定期的に運動することやオフを自分の趣味の時間に当てています。

◆現在の夢・将来の展望

医療技術の発展と人々の健康に貢献したいと思っています。特にこれまで研究してきた再生医療などの先端医療の実用化に貢献したいです。基礎研究から実用化までは多くの課題があり、非常に時間がかかりますが、サイエ

ンスを駆使してそれを乗り越えるのが研究者の仕事であり、博士人材の実力を発揮できる場面だと思っています。「自分がやった！」と誇れる仕事をしたいと考えています。

「後輩へ」

◆学生時代にやっておいたらよかったと思えること
一番は留学。学生で何でも挑戦できるときに、海外で勉強・研究をしてみたかったです。その他、勉強、研究、部活、旅行、遊びなど、「今しかできないこと」を、時間的にも余裕がある学生時代にもっと経験して、自分の引き出しを増やしておきたかったです。

◆その他なんでも、後輩に伝えたいこと

キャリアを形成していくうえで、人とのつながりを大切にすることが重要だと思います。一緒に仕事をしていく「仲間」、困難なときに助けてくれる「恩人」、自分が尊敬できる「師匠」など、仕事だけではなく、日々生活していくうえでも大事な存在です。若いときに作った人脈は今後の人生できっと役に立つと思います。

連絡先 E-mail: Yasushi.Satoh.1214@gmail.com

Interview ②

山梨大学大学院生命環境学域 ワイン科学研究センター 助教

乙黒 美彩



出身大学・卒業年度：山梨大学大学院物質工学専攻 2002年博士後期課程修了

博士論文タイトル：希少放線菌*Actinokineospora*属の分離・分類及び生物活性に関する研究

「現在の仕事について」

◆担当職務

生命環境学部地域食物科学科での講義・学生実験および研究指導

◆現在までのキャリアパスとその配属での仕事内容
独立行政法人製品評価技術基盤機構バイオテクノロジーセンター(NBRC)の非常勤研究員として働き始めました。NBRCでは放線菌の担当として微生物の保存や分譲業務を行ったほか、インドネシア、ミャンマー、モンゴルとの共同研究に携わりました。その間、ポスドク期間を経て正規職員へと採用していただき10年間勤務しました。

その後、山梨大学のワイン科学研究センターの助教に採用されました。現在はワイン醸造に関連する酵母・乳酸菌に研究対象を変え、教育と研究に従事しています。

◆そこでのやりがい

学生が研究に邁進し、卒業する時にはこの研究室に来てよかった、先生に指導してもらってよかったと言ってもらえた時にもっともやりがいを感じます。

◆現在の会社・組織(アカデミアを含む)の魅力

若い学生たちに微生物の魅力を語れるところ。

◆現在の就職を決めた理由

学位取得後すぐに結婚はしたのですが、10年間は別居

婚でした。当時、子供二人は私のもとにいましたので、父親と離れて生活していました。しかし、やはり家族と一緒に生活したいという思いが強くなり、夫の勤務先である山梨県で微生物に関連する転職先を探していました。

◆将来設計（描けるキャリアパス）

微生物に関わる仕事を続けていきたいです。

◆挑戦したいと思っていること

スカイダイビング、パラグライダーなど

◆社会人として一番感動したこと

多くの方々との出会いから、それがまた新しい出会いにつながり、研究の発展につながったことです。

◆社会人として一番困難だったこと&どう乗り越えましたか

保育園や学童のお迎えの時間があるので子供が小さいうちは、研究に費やせる時間が限られます。そんな時は短期集中で仕事をこなし、子供が少し大きくなってからと割り切って、焦らずゆっくりとキャリアアップにつなげました。

◆仕事のプロになるコツ

常に締め切りを意識する。時間を有効利用することを心掛ける。優先順位をつける。

◆博士力、どこで発揮していますか？

大学教員は小学生から一般の方々まで、いろいろな世代の人に研究内容の紹介や講義をする場面が多くあります。話をする相手を考えて、内容をまとめプレゼンする時に博士力が発揮されていると思います。

「人生について」

◆何のために働くのですか？

家族の幸せと自分の探求心

◆ご自分にとって、お金を稼ぐ意味

子供たちと自分の趣味のために好きな研究をやって、お金を稼げるなんて幸せです。

◆ワークライフバランスで工夫していること

中学生、小学生、保育園と3人の子供がいるので、休日は家族と過ごす時間を大切にしています。

◆現在の夢

ワイン科学研究センターを日本のワイン研究の中核組織にする。日本ワインの魅力を多くの人に知ってもらう。

◆将来の展望

日本ワインの発展のために自分の研究成果を活かし、ワインづくりに携われたらいいなと思います。

「後輩へ」

◆学生時代にやっておいたらよかったと思えること

資格取得と海外留学や留学生との交流。積極的にコミュニケーションをとってほしいと思います。

◆その他なんでも、後輩に伝えたいこと

若いうちはとにかくいろいろなことにチャレンジしてほしいです。そこから生まれる出会いも大事にしたいと思います。諦めることは簡単ですが、人生欲張りになることも必要かと思っています。

連絡先 E-mail: motoguro@yamanashi.ac.jp